1歳6か月児における口腔習癖、特にPacifier、吸指癖の経年調査
—第2報 保護者の対応と咬合状態—

○浜田作光、柳澤友子*、杉村和昭、竹越史子、進士久明
（神戸大・小児歯、*柳澤歯科医院（高崎市）

【目的】
幼児期（1歳6ヶ月児）の口腔習癖、特におしゃぶりの使用（pacifier-sucking）と吸指癖の長期調査を行い、43回日本小児歯科学会でその頻度などで報告した。その結果、おしゃぶり使用者の增加と吸指癖の減少が認められ、低年齢児の口腔習癖の状況に大きな変化が認められた。我々は、経年調査結果から口腔習癖への対応方法を立案し、母子に応用した結果を報告している。今回は、習癖と咬合状態について、抑制経験などから考察する。

【対象】
平成9(1997)年から平成16年までの8年間に横須賀市北部地区で1歳6ヶ月健康診査を受け診した者を対象とした。

【方法】
口腔内診査は、一般に乳幼児健診で行われる項目とした。全ての被検者に口腔習癖の経験、継続状況、発見時期、中止時期、保護者の習癖抑制経験とその方法などを聴取した。さらに、おしゃぶり使用者に、1）使用理由 2）抑制適応時期などを聴取した。

【結果および考察】
①対象者は2,820名で、女児1,374名、男児1,446名であった。
②調査対象者の47.9%が習癖の経験者で、吸指癖が21.4%、おしゃぶり使用者が23.5%認められた。
③抑制経験の割合は吸指癖およびおしゃぶり共に減少傾向を示した（図1）。
④吸指癖では抑制経験がある者に継続者が多かった。
⑤開口・上頬前突は、全体の19%で吸指癖では44%、おしゃぶりの使用者では30%であった。また、吸指癖は、近年減少傾向を示したが、おしゃぶり使用者では変化が認められなかった（図2）。

吸指癖は保護者の対応により、継続者および不正咬合の減少に寄与したと考えられた。

1)浜田作光ら：1歳6か月児における口腔習癖、特にPacifier、吸指癖の経年調査。小児歯誌43(2):213,2005。